魔法の国の空の下で

のーべん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国の空の下で

【Nコード】

N0633W

【作者名】

のーべん

【あらすじ】

緒川空と青空由理。平凡(?)な高校生カップルである2人は、ある日突然、異世界に召喚されてしまった！ 召喚されても全く慌てる事の無い2人を中心にした、ハイテンションスペクタクルラブコメ(意味不明)はじまりますよ！

はじめに 注意事項&人物紹介

注意事項

あらすじの通り、最初からカップル成立しています。

1つの物語が終わった後なので、色々なオリキャラの名前が出てきますが、そのあたりはご了承ください。

パロディ満載です。電波満載です。

リア充爆発させないでください。

更新は不定期極まりないものになります。

以上の事が許せる方は、本編へお進みください

人物紹介

緒川 空 男

主人公。素直クールで冷静でちょっと天然。そして鈍感。基本的にツツコミ役。

そのツツコミが率直極まりない。

由理の事は大好き。それと、空を見るのが大好き。

名前が空になった理由だって、空が好きなキャラにしよう、という思い付きから。

作者の男性の理想像を全部詰め込んだものだったりする。

空君って呼んで下さい。

青空 由理 女

ヒロイン（多分）。非常なハイテンションで、常に動き回っては空君を困らせる。

空君のことが（ry あまり好きだとか口に出して言ってくれないのが少々不満。

兄の影響でオタク気味。そのためすぐにパロディチックなセリフやメタ発言を繰り返す。

苗字については空君が空好きだから、苗字青空でいいだろー、というレベル。

名前に至っては語呂がよかったものを変換したら一番上にあっただから、というレベル。

ラミア・リンスヴァード 女

巫女さん3人組の1人。ほんわか系だけどちょっと黒い。生術担当。

パルス・ラツィア 男

巫女さん3人組の1人。なんというかクルツ。というかそれ以外の表現ができない。

やたらと由理を口説こうとしてはフィオネに殴られる。フィオネの恋人。理術担当。

巫女さんやってる時は、歌姫エリアを演じている。男の娘ですよ。萌えないけど。

フィオネ・グリネン 女

巫女さん3人組の1人。パルスの彼女。やたらと由理に流れたがる
パルスを見ては制裁を加える。
化術担当。

第1話 どじやら異世界とやらに召喚されたようだ

「空君、今日のデートもアニメイトだよ!」
「他にないのか」

俺は、この日曜、またデートに駆りだされた。
行き先も同じようにアニメイトである。

俺は正直、あの手の店で買うものはない。

由理が買うのをどうこういうつもりはないが、かといって、俺まで買うほどのことでもない。

趣味の合う友人と行けばいい、といったら、「こういうのは、彼氏がついてみてくれるものなの!」などといわれた。

そのあたりの事は、恐らく由理の方が詳しいので、その言葉に従って来たのである。

「んもー、いつもいつも難しい顔してー」

「いつもの事だ」

「そーなんだけど、こんな可愛い彼女とあるってたら、ニヤニヤしたりしない?」

「しない」

いつもどおりのやり取りを、いつものように行っ。

が、今回は、いつもどおりではないものが出てきた。

足元が急に、暗くなった。

「え、これどうしたんだろ?」

「分かん」

「落とし穴かも」

「道路の真ん中にそんなものあるまい」

などといっているうちに、本当に落ちる感覚がする。咄嗟に、由理の体を抱き寄せる。最早、外聞など気にしている場合ではない。何かあつてからでは遅いのだ。

「空君！？ いやん、大胆！ でも、キスマでなら」「真面目にやれ。こんな状況で言う事ではないぞ」「う、そうだよね」

あまり長くない滞空時間の後、開けた広場のような場所に俺たちはいた。

由理は、どうだ。隣を見る。

「あ、空君？ いつになったらキスしてくれるの？ 今落ち着いたよ？」

目を閉じている。無事なようだ。ならばいい。次は状況確認だ。改めて、周りを確認する。広場だけあつて、大勢の人がいる。

そして、俺たちに一番近い位置に、少女が3人。

金髪の少女。背が高く、顔にベールをしている、青い髪の少女。それと、赤毛、というよりは真紅の髪をした闊達そうな少女。

他の人間も一様に、俺達の方を見ている。

とはいえ、第一印象とすれば 妙な格好としかいいようがない。3人の少女達は揃いも揃ってローブなど身に纏い、それ以外も、なんとなく中世の欧州だかそのあたりの服装である。

「妙な格好だな」

第一印象を由理に囁く。

由理は、ようやく目を開き、口も開き始めた。

「ねえ、キスはまだ……って、ありゃ？ ドラクエのコスプレ撮影会？ そんなところに連れてきたわけじゃなかったんだけど」

「そんなところに連れてこられる、といわれた覚えもないな」

「これはきつと、ファンタジーの世界だよ」

したり顔で言われる。

その発想はどこから来る。

というか、どこにアンテナを向けると、そんなものが受信できる。

「カルト宗教かもしれん、これは」

「いいや、ファンタジーの世界。間違いないよ」

「なら、フィクションだ」

「あ、オーラロードが開いてバイストンウエルにー、とか？」

「オーラ力持ちの聖戦士なのか、俺たちは」

バッドエンド直行だな、という言葉はさすがに飲み込む。

こうなれば、俺も話をあわせたほうがいい。

由理も、なぜかやる気に満ちた目を俺に向けている。

これは間違いない。好奇心のスイッチが入ったオーラが出ている。

俺はこの状態の由理に対処する事は出来ない。

「あ、あの、お2人は？」

助け舟だろう。金髪に声をかけられた。

「高」

「恋人です！」

高校生といおうとしたのだが、先手を取られた。目の前の金髪は、呆気に取られている。

「あ、あら、恋人、ですか」

「んもう、ラブラブカップルですよ」

「黙れ」

「いやん、ひどい」

「あ、あの」

これでは話が進みそうにない。

仕方なく金髪に何か用か、と聞くと、どうやら想定外の事だったようで、俺達を別室に案内することだった。

残りの少女2人のうち、背の高い1人は、騒ぎになっている群集を沈めている。

なんらかのカリスマ的存在のようだ。

残りの1人が寄ってきて、俺たちに言った。

「とりあえず、そういうの人がいないところでやって欲しいな」

「人がいないところでもやりたくないのだが、俺は」

「と、とにかく、一室空いていますので、そちらにご案内させていただきます」

金髪が、どうにも慌てた様子で言う。

普通、こっぴつ場合、慌てるのは俺たちの立場ではなかるうか、とふと思う。

由理に声をかけようとしたら 隣にいなかった。

しまった。今の由理は、好奇心全開である。
手を握って置けばよかった、と後悔する。

「済まん」

「なんでしよう」

金髪が反応する。

「由理 俺の恋人がいなくなった」

「は、はい!？」

「え!？ そういふのには早いわよ!」

どうでもいいようだが、金髪じゃない方は、口調が由理と被る。

これは、恐らく2人を会話させたら、途中で分からなくなるかもしれない。

今はこんな事を考えている場合ではないが。

「一緒にいた女の子だよね？」

「ああ」

「探してあげるよ、大切な人なんですよ？」

「助かる。そういえば、名前を聞いてなかったな」

「私はフィオネ。それで、こっちの金髪の子が」

「ラミアです」

「そうか、俺は緒川空だ」

「オガワソラ君？ 変わった名前だね」

フィオネとラミアが不思議な顔をする。

成る程、繋がっていると思われるらしい。

「空でいい」

「分りましたわ」

なににせよ、搜索を手伝ってくれらるといふ、ラミアとフィオネに礼を言つて、手分けして探そうとした時、聞き覚えのある声を聞いた。

間違いなく由理の声である。あの、背の高い女も一緒である。

「空君空君！ 聞いてよ、この子、歌姫やってるけど、きっと男の娘だよ！」

一気にまくし立てられる。

よつするに、女装しているらしい。

男の子、と同じように発音するのだが、最近はイントネーションで聞き分けられるようになっていたのだ。

背が高いように見えるのは、そのためだったようだ。

「な、なんかテンション高いね、この子。可愛いけど」

女装が、呆れ気味に俺に語りかける。

どつという理由で女装しているかの方が、今語って欲しいのだが。

「苦労している」

「それって、私みたいな可愛い彼女への言葉かな、空君」

自分で言うな、と毎回言っているの、今回は流す。

ここに来る前も言った気がするの、面倒だ。

「って、空君もしかして浮気ー？ 両手に花でウハウハー、とか考えてないよね」

「ええと、空君は、由理ちゃんの事、必死に探そうとしてたよ？」

なぜかフィオネがフロアに入る。

そんなことせずとも、流すだけでいいようなものだが。

「んー、わかっててやってるかな。お約束なの、お約束」

「やっぱり、空君って、大変じゃない？」

「問題ない。それよりも由理、なぜその少女が女装だと分かった」

どうみても、外からの見た目で男性と分かるようなものではない。

一目で女装と見抜いた眼力は、賞賛されるべきものである。

「えっとね、この子ね、エリアちゃんだけ？ ま、いつか。なんか、胸はないし、よくみると地味に筋肉ついてるし、なんか雰囲気がかつちよいいし！」

言われた方は驚いている。

「どうやら、凶星だったようだ。」

「ボールを外し、口を開く。」

「まさか、俺のこと一発で見抜かれるなんて思ってなかったぜ。もしかして、俺にほれちゃったとか？ なら、今すぐ食事でもどう？ 雰囲気かつこいいとかいってくれたしね！」

「おお、それいいね！ 行こうかー！」

食事の誘いをされ、それに乗る由理。

なんとというか、既視感を覚える光景である。

別に、行かせた所でどうということもあるまいが。

初対面の相手と食事するのは、親睦を深める良い方法である。

見ると、食事に誘った女 いや、男だったが、フィオネに頬を

つねられている。

「ったた、何すんだよ、フィオネ！」

「可愛いからってすぐ口説かない」

「だって、この子だって乗ってくれたぜ？　なあ、ええつと」

「由理でーっす！」

「そう、由理ちゃんも！」

「由理ちゃんには立派な彼氏がいるわよ。ていうか、パルスも見たじゃない！」

「こいつか？」

「こいつじゃない、空君！　空君も何かいっていいよ、この馬鹿に」

なぜか俺に話が振られる。

なぜ俺が巻き込まれるのだろう。喧嘩なら、勝手に2人でやってほしいものだ。

そういえば、原因は由理にもあつたはずだ。

自分が原因だというのに、ただ楽しそうな顔を浮かべているとは、どういふう見だろうか。

ラミアは、こういう場面に慣れていないのか、おろおろしている。そういえば、初めて見たときからおろおろしていたような気がする。

「由理。よく分からんが、フィオネと、パルスか？　その2人の喧嘩の原因を作ったようだから、2人に謝れ」

「そう来たかー、新パターンだね、こりゃ。まあ、ゴメンネー」

「へ？　パルスが口説いた事はお咎めなし？」

「彼は食事に誘っただけだろう」

この事実のどこに間違いがあるというのか。

なぜか、その答えを驚愕の答えのように、ぼかんとするフィオネ。

正直、ここでもクイズをやるとは思っていなかった。

「ふ、ふっー、彼女口説くような悪い虫よってきたら、追い払おうとするんじゃない？」

「悪い虫って俺かよ！？ いや、口説く気あつたけど」

「む、口説こうとしていたのか」

「由理ちゃん口説こうとしたんだよ、怒っていいわ！ むしろ、こいつと私のために怒ってやって」

「？ 誰が誰を口説こうと、自由ではないか」

恋愛の自由は精神の自由の一部である。

その権利は保障されていい。暴力的手段を伴えば、その限りではないが。

なにより、信頼している相手だ。その程度、目くじらを立てる事もない。

「な、なんか、俺すっげー相手にされてない気がする」

「空君で、もしかして、大物？」

「あー、空君はねー、私が本気で浮気すると思っただよ」

「それで、スルーしてるんだ……凄いわね」

「前なんでそんな焦らないのー、って聞いたたら、信じているから、って言われたんだよー。もー、さらりと爆弾落とすんだよねー」

「ほ、本当に凄いわ……」

なぜか、フィオネから尊敬のまなざしを向けられる。

会話の内容は聞き取れたが、なぜ尊敬されるのかが分からん。

そのフィオネは、パルスに視線を移すと、俺を見習え、とかいいながら、再びパルスの頬をつねった。

「つつつつー！」

「あんたも、空君みたいに、懐の大きい男になれたりしないの!？」
「だから俺も懐大きいじゃねえか、何人も女の子囲えるくらいに！
つつつか、こいつも誰が誰口説いてもいいつつたじゃねえか、
いってええええええ!」

フィオネは何を言っているのだろう。

それと恐らく、あのつねり方は痛いだろう。

それでも、オーバーな反応な気がしないでもないが。

「痴話喧嘩、止みそうにないねー」

「痴話喧嘩?」

「どうみてもそうだけど」

痴話喧嘩。なるほど、その単語でようやく、フィオネとパルスの
関係が理解できた。

「フィオネとパルスは恋人なのか」

「へ?」

「おい」

「仲良くな」

なぜか、呆気に取られて、さきほどまでの熾烈な争いをやめる2
人。

今度は2人仲良く、俺を何か別の生物でも見るかのような様子で
見る。

確かに、異邦人かなにかだろうが、珍獣ではない。

まあ、どんな理由にせよ、喧嘩をやめたのはいい事だろう。

平和が一番だ。

「あ、落ち着いた、ようですね。フィオネもパルスも」

「凄い空君、喧嘩やめさせちゃった」

「では、お部屋で落ち着くとしましよう」

ラミア達に案内され通された部屋は、巫女の部屋、というらしい。彼女たちの控え室のようなのだが、どうにも豪華な部屋である。シャンデリアが存在する控え室など、俺の記憶にはない。

「では、お座りください」

その言葉で、ソファに腰を下ろす。

見た目どおり、上質な座り心地である。

腰が疲れないような作りをされている上物だろう。

由理は隣で、その感触を確かめるかのように、ソファの上でも動き回っている。

言っても無理だが、落ち着け。

ラミア達がどうすればいいか迷っているようなので、放っておけばいい、と教える。

「うわ、それって冷たいんじゃない？」

「流石に、恋人さんにそれはどうかと思いますわ」

「お前、恵まれた立場分かってないだろ」

「俺たちに、今の状況を説明してくれ」

ラミア達がさきほどまでの非難の表情から一変、今度は驚きの表情で俺を見る。

そして、3人で顔を突合せて、なにやらひそひそと話し始める。

一体なんだというのだ。

時折、「スルーされた」とかなんとか聞こえてくる。

隣の由理はというと、まだソファの上を跳ね回っている。俺は何をしていると言うのか。

「あれ、空君、暇そだね」

顎で前の3人を示す。

由理はそれを見ても、「なんの密談だろーねー」などと愉快気である。

いつまで話してるのか見通しがつかないのでは、俺はそうは思えないが。

「あ、終わったみたい」

見ると、3人揃って俺たちの顔を再び見ている。どことなく、困惑した様子が感じて取れる。

「空さん。由理さん」

ラミアにこう切り出される。

恐らく、今俺たちの置かれた状況を説明するのだろう。だったら最初からそうしてほしいのだが。

「あなた達は、勇者召喚の儀式でこのリンスヴァード王国に呼び出された、と思われます」

突飛な話だ。

常識の範囲で言えば、笑い飛ばすのが普通だろう。

だが、俺たちの常識だけではかりきれぬものでもないはずだ。

何より、目の前の3人の妙な格好が全てを物語っている。

「およよ、そしたら使い魔とかじゃないんだ、待遇はばっちりだね
」！」

由理が相も変わらず、輝く笑顔でそう語る。

いきなりそんな事を言われたというのに、慌てるどころか乗り気
になっている由理に、彼らも驚いているようだ。

俺はなれたので、どうということもないのだが。

「気になるのそっち！？じゃなくて、そう、勇者召喚の儀式なん
だけどね、私達も呼び出せると思ってなかったわよ」

「えー、夢がないよー」

由理がぼやく。

異世界にやってきている時点で、十分に夢物語だと思っただが。

「大分昔に形骸化しちまってな、今はお祭りみたいなもんさ」

「成る程、昔あった儀式を、行事化したわけか。よくある例だ。し
かし、ならばなぜ俺たちがここに？」

形骸化した儀式、という言葉に従えば、要するにここしばらくは、
召喚されたものなど何もいなかった、ということになる。

「分った！凶悪な魔王が現れて、それを討伐する力が私達にはあ
るからだよ、空君！」

由理が、さも完璧な考えというように握り拳で話す。

もしそうだったら、呼ばれた時点で、もっと緊迫した様子で何か
伝えられたはずである。

「あー、そりゃなーわ。魔王とかいねーし、平和だし」

パルスが答える。落胆する由理。

俺にとつては、それ以前の問題だが。

呼び出す方法がわからないのに、どうやったら狙って呼び出せるというのか。

「呼び出しておいて心苦しいのですが、なぜあなた方がこちらへ来られたか分らない以上は、現段階では送り返す方法も分りません…

…」

ラミア達から、心からの、謝罪をうける。

俺たちは、そこまで気にしてないと伝える。

ちなみに、本心である。

「そういつてもらえると、少しは楽だわ」

フィオナが、安心した様子を見せる。

それに続くパルス。こちらは、俺たちの様子を不思議に思っているようだ。

「それより、お前ら。なんか、慌ててないよな。普通パニックになつてると思っただがよ」

「その事か。俺は起きた以上は受け入れているだけだ」

そう、起きてしまった以上は仕方がないのだ。

もう一つ付け加えるとすれば、由理の兄によって非常識という言葉には慣れすぎている。

目の前の3人の方が余程常識的だ。

「私は、こういう世界楽しそうだなって思ってるから、そーいうのはナツシング！」

由理の答えにも、いくらか慣れたのか、苦笑いを浮かべて、よかつたね、などと返す3人。

3人とも、悪い人間ではないようだとは分つたのが、何よりの収穫である。

「そういえば、まだちゃんと自己紹介をしていなかったな。俺は緒川空。空と呼んでもらって構わない」

「私は青空由理。由理って呼んでね！ 後、空君の彼女です、ブイ！」

勢いよくやる由理だが、果たしてこれがどこから来ているか通じるだろうか。

いや、通じるわけではないだろう。それでもお構いなしなのがらしいといえばらしい。

「私はフィオネ・グリネン。フィオネでいいわよ」

「あー、私と口調かーぶーるー」

「え？」

「気にするな」

どう考えても、そんなことに文句を言っても仕方がない。

俺も、口調が似ているな、とは思うが。

「次は俺だな。パルス・ラツィア。パルスって呼んでくれ！ 後、フィオネの彼氏だぜ、ブイ！」

「えへへ、返してくれたね！ やったー！」

「よし、今日は2人で食事しようぜ。個人的な親睦を深めようじゃないか」

どこかで見たやり取りである。飽きないものだ。

そして、さつきも見たように、パルスは頬をつねられる。

やはりどこかで見た。本当に飽きないものだ。

「あ、あの私の番なのですが」

相変わらず、その場の空気に介入できないままだったラミアが、なんとかして口を開く。

「俺は構わんぞ」

「でも、由理さんが」

「ほうっておけ。興味があれば戻ってくる」

「では。私はラミア・リンスヴァードです。一応、この3人のリーダーということになっています」

確かに落ち着いてはいる。

成る程、まとめ役としては一番いいかもしれない。

もっ少し、自分を押し出してもいいような気もするが。

「リンスヴァード？ この王国もリンスヴァードといったな」

「そう、ラミアはこの国のお姫様でもあるわ」

パルスの頬をつねながら、フィオネが付け足す。

「ほへー、お姫様なんだー。あれかな、あれかな？ 悪い大臣とかにぐへへへ、とか狙われちゃった事とかあるのかな？」

「いえ、そんな事は……それより、ぐへへへ！？」

「付き合っただけ無駄だ。流していいぞ」

「んもー、そんなマジレスしないでよー、泣いちゃうよー」

面倒くさい。

ラミア達に、泊まれる場所はあるか、と聞く。

どうやら、この城の一室を貸し出してくれるらしい。

一応、勇者として呼び出したので、国賓待遇にしてもらえると
いわれた。

正直、寝床と最低限の食事でも用意してもらえばそれでいいの
だが。

だが、厚意を無碍にするのも気分が悪い。

ならば、素直に聞き入れるのが最善というものだろう。

「では、案内しますね」

今考えると、姫じきじきに案内などしている事になる。

どうやら、自分は身分が高い、と周りを見下すような事はない人
物のようだ。

「って、空君、1人だけお休みするつもりー!?!」

「置いていかれるのが嫌ならば、ついてくればいい」

「ひっどーい!」

由理の非難をいつものように流しつつ、いつもと少し違う生活が
始まるうとしていた。

そのためにも、今日は案内される部屋でゆっくりと休めればいい
のだが 由理が大人しくしてられるわけが無かった。

案内しているラミアの後ろで、フィオネとパルスに向かって騒ぎ
立てる。

「ねえねえ、この世界って、召喚儀式やるくらいだから、魔法ってあるんでしょ!?!」

「う、うん」

「やっぱりあるんだ! やだー、私もつかえるかな、気になるー!」

このままでは、またどこかへ消えかねない。

由理の手を掴む。とりあえず、これでどこかへ消えたりはしまい。俺の行動に驚いたのは、フィオネとパルスである。

2人とも目を丸くしている。

「え、空君って、そういうことも一応やる人なんだ」

「そんなイメージ無かったぜ。ツボは押さえてるんだな、おい」

「あー、これはねー、私が勝手に動き回らないための措置みたいなもの、かなー」

由理が気持ち、落ち込んだような様子で語る。

そうでもないといなくなるのだから、仕方あるまい。

「えーと、恋人だからっていうより、親が小さい子供の手を引いてるのに近いの?」

「うん、そんな感じなんだよね」

「でも、なんか納得したぜ」

パルスもフィオネも、納得したようだ。

確かに、今日の事を見ても、すごいなくなってしまうというのがわかる。

その反応で、珍しく硝気ている様子の由理に、フィオネが声をかける。

「そうそう、魔法使いたい、だっけ？ 私達、魔法学校に通ってるから、一緒に通うってどうかな？」

「魔法、学校？」

変な餌が与えられる。これは間違いなく、食いつく。

「魔法学校かー、私、そういうの憧れてたんだよねー！ ホグワーツみたいな感じかなー、いいなー」

「ホグなんとかってえのは知らないが、楽しいぜ！ なんなら、先に魔法の基礎知識でも教えてやるか？ 勿論、マンツーマンで」

「へー、マンツーマンかー。家庭教師みたいで、いいね！」

これは、もしやまた同じ流れになるのではないだろうか。学習しないのか。わざとなのか。

前者なら、ただの馬鹿で終わりだが、後者なら、無闇やたらと類をつねられよう、などと奇行に走っていることになる。

そして、やはり頬をつねられるパルス。

「魔法の基礎知識なら、どの道空君にも説明しないと、だ、め、じや、な、い！？」

どうやら、区切りごとに力を込めているらしい。

今回は、つねるだけではなかったようだ。

見事な拳と蹴りが入っていく。

そのたびに聞こえてくる呻き。

「ちょ、ま、つねるだけって約、じ、ごふあ、ぐおわッ！」

今日確認した限りで3回目だ。

やり方を変えたのだろう。

俺たちの知る言葉には、仏の顔も3度まで、というものもあるくらいだ。

「おお、ダイゴダア、ってやつだね！ やっるうー！」

由理が、妙なところに感心する。

それならば、ダイイチダア、あたりからやらねばなるまい。

パルスがノックアウトされたようだ。グッタリしている。

大丈夫だろうか。あれは。

「ええと、そういう話でしたら、ひとまずお部屋に入って、それからでもよろしいのでは」

俺たちより付き合いがずっと長いであろうラミアが気にしていないのなら、大丈夫だろう。

それ以前に、フィオネも加減を知っているはずだ。どうせ、死にはしまい。

大体俺の今までの経験で、この手の輩の生命力はゴキブリ並である。

「そうだな」

「パルス君、こんな状態で大丈夫？」

由理が心配そうな表情を浮かべる。

だが、どこから拾ってきたかわからない木の枝で顔をつつついているせいで、道端に転がっている犬のフンか何かをいじっているようにしか見えない。

「大丈夫じゃない、問題だ、とでもいわせたいのか？ だが、問題

ないだろう。恐らく」

「ちよつと、突っ込むタイミング逃しちゃったよ！ テンプレの後に別の処理入れるなんて、ひどーい！」

「む、騒ぎすぎてしまったか。済まない。部屋に案内してくれ」

俺の言葉に、少々呆れ気味になっていたものの、ラミアは部屋に通してくれた。

第2話 魔法とはこういうものなのか

「こちらが、お2人の部屋になります」

ラミアに通された部屋は、先ほどの控え室を凌ぐ広さと格調の高さを誇っていた。

決して煌びやかではないが、上質の素材で作られたとわかる家具の数々や、丁寧なつくりの絨毯。

生きているうちに、こんな部屋に寝泊りする事になるうとは思っていないかった。

どうも、国賓というのは冗談ではないようだ。

由理はといえば、すでにはしゃぎまわってあちこちを見て回っている。

「あ、あはは。元気だね、由理ちゃん」

「む、来ていたか。パルスは？」

「寝てるわ」

「成る程」

さて、由理を落ち着かせなければなるまい。

それでなければ、話にならないし、魔法学校にも入れないだろう。

「由理！ 戻って来い！」

「えー、だってこっちのダンスも、うわ、すっごーい！」

「魔法の説明とやらを受ける気はないのか！」

「あ、そういえば魔法の説明してくれるっていったね！ うんうん、それ聞かないと！」

いなくなるのと同じくらいの速さで戻ってくる。

こういう場合の扱いは簡単なのだが。

それを見ていたラミアとフィオネは半分呆れ顔である。

「ほ、本当に自由だね、由理ちゃん」

「ええ、少し、羨ましいくらいですわ」

「悪いが、話を始めてもらっても構わないか？ でないと、またどこかにいってしまいそうだからな」

隣で立っている由理は、目を輝かせて、説明を待っている。
だが、いつまでもじっとしてはいられないだろう。
これは確実にいえる。

「分かりました。では、お2人とも、椅子におかけください」
「うん、分ったよ！」

椅子に座るや否や、早く早く、と机をたたき始める由理。

「大人しくしろ。話が頭に入らなくなるぞ」

「むーっ」

「では、始めますよ。よろしいですか？」

ラミアのその言葉に、由理は待ってましたー、と拍手する。
いくらか慣れてきたラミアは、それを軽く受け、語り始める。

「基礎として、3つの属性がありますわ。理術・化術・生術」

「それで、属性をつかさどる神として、理術の神フィスコ、化術の神ケイミスト、生術の神ヴィオラがいるんだー。それでね、その上に、幻術の神フアーナシアがいるわね」

「ほほう。3神のボスつてわけね。そのフィナ？　フィオレンティナ、じゃなくてフアンタジー。あれ？」

自分で茶々を入れ始めた上、名前を正確に言えず、流れを断ち切る由理。

正直、馬鹿だな、と思ってしまった。

しかも、フィオレンティナはまったく関係ない。

「ファーナシア、ですよ。簡単に言うと、3つの属性のそれぞれ関係のある神と、ファーナシアの力を借りて、魔法としての力を発現させているんですわ」

「しかし、ファーナシアそのものが司る魔法というものはないのか？」

「ファーナシアは上位種にあたり、幻術を司っているのですが、それを扱う事が出来るのは、伝説では勇者のみ、と伝えられています」

「ほほう。じゃ、私達はきつと幻術使えるね。勇者だし！」

「俺たちは凡人だ。そんなんじゃない」

「夢がないぞー、空君。魔法を使っている自分を、イメージしろ！」

そんなこと、今に始まった事ではないし、俺からすれば、由理は妄想が過ぎる。

この辺りは、感性の違いだろうか。

「具体的には、属性別に何が出来る？」

「空君も使う気満々じゃないかー」

「つかえるとは思えないが、知っておく事に損はあるまい」

「では、分けて説明していきますわ。まず、私が得意とする生術ですが、これは、生命に関わる系統の魔法ですわ」

「それって、ベホマとかベホマズンとかキアリーとかザオラルとかザラキーマとかケアルとかそんな感じ!？」

身を乗り出して一気にまくし立てる由理。
それではまったく通じまい。世界が違う。

案の定、フィオネもラミアも顔に疑問符を浮かべている。

「済まんな、訳の分からんやつで。由理が聞いたのは、傷を治したり、或いは命を奪ったりできる感じなのか、ということだ」

合点がいく2人。

由理は俺の顔を見ながら、おお漣い、などと感心している。
自分で説明しろ。

「そういうことになりますわ」

「じゃじゃ、実際にやって見せてよ!」

「しかし、死に追いやる魔法などはつかえませんが、けが人もいませんわ」

その言葉に、俺は1人思い当たる。ちょうどいい実験台が。

「いる。パルスだ。確か今も廊下で倒れているはずだ。あれでも大丈夫か?」

「あー、ノックアウトされてる状態でも大丈夫か、ってこと?」

「そうなるな」

「そうですね、やはり、実際にやって見せた方がいいでしょう」

フィオネとラミアの許可も得たので、パルスをひきずってくる。

口からは見事に泡を吹いており、正直、フィオネの攻撃は中々の攻撃だったな、との感想を抱く。

いい武闘家になれるかもしれん。

で、ラミアはというと、俺たちの目の前で、ノックアウトされているパルスに手をかざす。

「この魔法は杖とか必要ないんだー」

「杖、ですか？」

「うん、魔法に杖必須だったりするお話もあるんだよー」

「では、いきますよ。グリオ・デル・ヴィ・ケム・ヴィオ！」

所謂呪文なのだろう。その言葉が終わると同時に、暖かさを感じる光がパルスを包む。

すると、それまで泡を吹いていたパルスが、むくつ、と起き上がる。

「どうやら、まだ意識がおぼつかないらしい。」

それでも、魔法を信じるには十分な光景である。

「あ、あらー、ふわふわいい感じー。って、ラミアじゃねえか。俺の事気遣って癒してくれたの！？ やっぱ優しいぜー」

そういいながらラミアに抱きつこうとしたパルスだが、いつの間にかラミアの前にフィオネが立っていた。

阿修羅の形相である。

その威圧感に、冷汗をたらし始めるパルス。

「あ、あー。フィオネ、フィオネちゃん？ 痛い勘弁ね？ マジ。マジで俺が愛してるの君だけだから」

「ふーん。言う事はそれだけね。魔法の説明のためと折角起こしてやったら、先にラミアに飛び込もうってワケ。もっぺん寝たい？」

そういいながら、骨を鳴らすフィオネを見て、顔から生気が飛んでいくパルス。

どう流れてもいいが、魔法を見せてもらわない分には話にならない。

「フィオネ、落ち着け。魔法の実演をしてもらおうと、わざわざ起こしてもらったのだ。俺は言えるほど親しくなっていないがここは見逃してやって欲しい」

「えー、空君。パルス君が殴られたら、またラミアちゃんに起こしてもらえばいいじゃない。結構なエンターテイメントだし」

さらりと恐ろしい事を口にする由理。

ここは格闘場ではない。

「え、由理ちゃん？ 嘘だよね！？ 君まで俺を見捨てるの！？」「キヤー、私を無理やり連れてこつとした変態さんが、また声かけてくるー。空君助けてー！」

事態をややこしくしようとする由理。

なぜこの兄妹は揃いも揃ってこつなのか。

もつとも、兄に較べれば、まだ優しいものであるが。

止めないわけには行くまい。

「由理、無駄にけしかけるな。やつがいかなゴキブリ並な生命力を備えていたとしても、痛いものは痛い」

「ぶーっ。ファンタジー世界はエンターテイイイメントでなければならぬ、だよ」

「それは王様にでも言っておけ。ともかく、ここはフィオネには落ち着いてもらっ」

そしてフィオネに向き直り、改めて頭を下げながら見逃すよう求める。

「さ、流石にそこまでされると、うん。パルス、あんた、空君達に感謝する。いいわね」

「由理ちゃんありがとう！ やっぱり君は俺の女神だ！」

「やだー、変態さんに言われても嬉しくなーい。空君に言ってー」

「お、俺はこんな無愛想な男なんか感謝する事はな……」

フィオネがパルスを睨む。恐らく、俺に礼を言わせようとしているのだろう。

そこまで俺に感謝させようとしなくてもいいようなものだが。

「主に誰のおかげで、命が助かったと思っているのかしら？ それと、一応、勇者様なんだけど？」

「俺は別に礼など言ってもらわなくても構わん。それより、魔法を見せてくれ。後はフィオネが好きにしてい」

「ちょー！？ 最後に爆弾置いてくなよ！」

絶望的な表情を浮かべ、俺達に助けを求めるパルス。

この痴話喧嘩は、恐らく永久に繰り返されるだろう。

そんなものを毎回止められるような俺ではないし、本人達も分かってやっている節があるようだ。

ならば、用だけ済めば後は勝手にやらせてもらえばいい。

「そっぴいわれても、やっぱりちょっとお仕置きしたいかな」

「や、やめ」

パルスの制止を聞き入れず、先ほどの連撃を叩き込みに行くフィオネ。

由理にとってはエンターテイメントのようである。

そこ、とかよし、とか体を振り回して叫んでいる。

いや、明らかにおかしい。

一撃ごとに衝撃波のようなものが出てきている。
あれでは間違いなく死ぬのではなからうか。

「う、ぐを、げあ、おぶおう!？」

「よし、そこそこ！ ワンツーフィニッシュウウウウウウウ！」

なぜこの光景を由理は楽しげに見ているのか。
よく見ると、パルスに傷ひとつついていない。
成る程。

「これも魔法、というわけか」

「そうなるわ。忌々しいけど、衝撃全部クッションして、派手なエフェクトで誤魔化してるの」

フィオネが苛立たしげに説明する。

すると、それまで悲鳴を上げていたパルスが立ち上がり、ニヤニヤしながら自慢げに話し始めた。

「へっへっへ。やっぱ気づいてたか。これが俺の得意な理術！ 物

理的なものに関する能力なのさ！」

「成る程、それで衝撃を殺したわけか」

「ま、その通りだな。参ったか！」

胸を張るパルス。

いくら殴られても、痛くはないというわけか。

部屋に入る前にフィオネにやられたのを見たので、準備が間に合えば、だろっが。

「おおっ、凄いねー！　なら、私も試してみるぞー！」

言うが早いか、パルスの懐に飛び込み、ラッシュを始める由理。兄に稽古をつけられたのか、流れるようなモーションである。

これは、そこらの不良など、その気になれば簡単に沈黙させられるだろう。

「はっはっは、いくらきても問題ないぜー！」

「おお！　これは人間サンドバツク！　ストレス解消にもってこいだね！」

人間サンドバツクとは何か。

危ない代物でしかない。

生身の人間を殴り続けてストレス解消とはこれいかに。

いや、パルスもなんだか嬉しそうだが。

「ジャブ、ジャブ、トドメは黄金の、右ストレートオ！」

「いつくだけでもこいだぜー！」

これはいささか気色悪い。

「うえっぶー！」

ために足を蹴飛ばしてみる。

転んだ。無意識の内という事にしておこう。

「つてえ、何すんだよー！」

「済まん」

しかし不思議な事だ。衝撃を消す魔法でも使っていたのではなか

ったか。

不意打ちには弱いだけかもしれないが。

だが、フィオネやラミアも不思議に思っているようで、首をかしている。

やはり、珍しい事らしい。

「空君なんかすごい！ ダメージ与えた！」

「うち、なんだってんだよ」

不快気な表情を浮かべるパルス。

殴られて嬉しそうな顔を浮かべている方がなんだといたい。

そのパルスを見ながら、「後でお仕置き、覚えといてね」と告げ、俺たちには自分の魔法を見せてくれるという。

「と、その前に。私の得意な化術は、水とか火とか、そういうのを操る系統だわ」

「由理。メラゾーマとかマヒヤドみたいなもの、というのは無しだ」

「ちよつと、宣告打たないですよー！」

「コストがないから違うぞ」

「え！？ それいくらなんでもチートすぎ！」

俺たちのやり取りにもなれたようで、フィオネは実演して見せてくれる。

これは、野宿などでは便利そうな魔法である。

家庭菜園などの手助けにもなる。水や火とは、色々と便利なものである。

「こんな感じね。どう？」

「調理の手助けにはもってこいだな」

「空君って、料理するの？」

「するよー、しかも上手だよー」

意外な顔をされる。

俺が料理をするというのは、そんな意外な事か。しかし、由理が妙なところにかみつく。

「なんかちょっと地味ー」

「あんま派手なのはね、部屋の中だし」

「それでもなんかもつと、エンターテイメントな魔法あるよね？
ばばーっとした！」

「無茶を言うな。部屋の中だと」

「そつだ、お仕置きって言ってたよね。それで！」

おお、その手があったか、と手を打つフィオネ。

なにやら名案のようだ。

この際だ、それも実演してもらおう。

「さて、お仕置きの時間だわ。パルス君？」

そつ言つと、フィオネの手に、水が集められ、更に冷やされて氷となる。

鈍器のような形のそれは、まさしくハンマーだった。

といつても、見た目はピコピコハンマーに近いが。

「アイスハンマアアアア！」

名前も見たままのようだ。

由理は感動している。戦闘用魔法を見られたからだろうか。

氷の槌をパルスに振り下ろすフィオネ。

手は冷たくならないのだろうか。気になる。

頭にぶつけられるが、何のこともないように笑うパルス。

「何度来ようと、このパルス様にそんな衝撃はムダムダ！ ってげえっ！」

「関羽！」

「なんだそれ、じゃねえええええええ！ それは流石にアウトだ、死ぬ死ぬ！」

見ると、フィオネはその腕に炎を纏わせ、その瞳でパルスを見据えていた。

間違いなくやる気だ。見れば分るが。

「こつちの方がよさそうだから、ねっ！」

「ウボアー」

断末魔と共に、燃やされるパルス。

合掌。

ともかく役目は果たしてくれたのだ、感謝する。
届かないだろうが。

「それと、まだ巫女について説明してなかったわね」

手をはたきながら、フィオネが言う。

「ラミアも気にしていない様子なので、ほっつておいても問題なからう。」

「年に1度の召喚の儀式を執り行う、それが巫女ですわ」

「化神の巫女だけ毎年変わるんだけどね、それに選ばれたのが今年は私達だったのよ」

「他の2人は以前もやっていたのか」

「ラミアとパルスは、その道の本家筋だからね。ここのところずつと。で、私達のとこだけ、本家筋がいなかったわけ」

「それで、毎年変えていたのか」

「ようするに、それが祭りの配役なのだろう。」

「そうであれば、本来は勇者役もいたことになる。」

「今回俺たちが召喚されたのは、アクシデントなのだ。」

「ならば、勇者役もいたのか？」

「役、って、随分と身も蓋もない言い方だね……。その通りなんだけど。うん、いたよ」

「フィオネが俺の問いを肯定すると、それまでパルスを突っついていた理由がこちらに顔を向けた。」

「その勇者役って、イケメンなの？」

「えっと、どついう意味、かな」

「美形なのか、ということだ」

「あー、まあ、入るかな」

「おおかた、打ち合わせ段階で顔を突き合わせていたのだろう。」

「それにしても、微妙な反応である。」

「おりよ、なんか奥歯に物がはさまった言い方だね、フィオネちゃん」

「勇者役の人が、ユース君って言うんだけど、”エリア”に惚れてるのよ」

「確か、エリアとは女装している時のパルスの名前だったはずであ

る。

そういえば、女装中は歌姫として扱われているようだ。

由理が歌姫と聞いていたから間違いない。

恐らく、絶大な人気を誇っているのだろう。

パルスがエリアだというのは、恐らくは秘匿されているはずである。

「厄介な話だな。つまり、今年の巫女は、表向きはラミアとフィオネ、そして”エリア”というわけか」

「そういう事ですわ」

「国のお姫様に絶大な人気の歌姫。大衆からすれば魅力的な人選だからね。毎年熱狂的になるけど、特に今年は、本家筋が3人揃ったから、余計熱狂的だったわね」

恐らく、儀式中を思い出していたのだろう。

遠い目をしながら、フィオネが語る。

王女に歌姫とあれば、人前で何かをするのにはなれていようが、フィオネは恐らくそのような事は体験した事がなかったのだろう。尋常ではないプレッシャーだったはずだ。

「そいえば、フィオネちゃんは何で今年の巫女さん選ばれたの？

なんか、フィオネちゃんも理由ありそな感じ」

「私はね、途絶えたはずのケイミストの本家筋だから選ばれた、つてところかな」

「ほほう。でも、それだけじゃなさそな感じですねー」

由理がフィオネの様子を見ながら言う。

確かに、それだけではなさそうだ。

ただ、であつたばかりの人の事情に踏み込む、という事はしない。

その点については、由理も同じである。

「中々鋭いね、由理ちゃん。確かに、最近色々あった末に、かな」「ふーん。それ以上は、話したくなった時によろしく!」

「空君はともかく、由理ちゃんはこういうこと根掘り葉掘り聞きそつだと思っただけだ」

「意外な顔してるー。私だってそんなに空気の読めない子じゃありません!」

頬を膨らませる由理。

しかし、ここまで散々自由に暴れまわっておいて、そんな事をよく言えるものだ。

「別に話しても構わないんだけど、長くなるんだよねー」

フィオネが頬杖をつきながらそういうと、いきなりラミアが割って入ってきた。

「止めておいた方がいいかと。砂糖あたりを吐いてしまつかもしれませんわ」

「ほほう、激甘ベタベタコツテコテラブストーリーなわけですか、気になりますですー」

「ちよつとラミア!?　なんか毒漏れてるし、由理ちゃんも言い方直球すぎ!」

「あら、私としたことが。これはいけません」

慌てたように口に手を当てるラミア。

少々わざとらしい。これはどうやら、思ったより食えない部分がありそうだ。

フィオネはというと、由理の言葉に顔を赤くしてうつむいている。

あれは恐らく、恥ずかしいのだろう。理由は不明だが、そのフィオネの様子を見て、由理が面白がる。

「あつれー、フィオネちゃん耳まで真っ赤ツかだよー？ よっぽどのベタベタコツテコテラブストーリーだったのかな？」

「そ、そういう由理ちゃん達はどのなの！？」

恐らく、フィオネの精一杯の反撃だろう。

だが、俺の記憶では、俺たちにはとりたてて人に話すような事などなかったはずである。

「私達も、中々のベタベタコツテコテっぷりだよーっ？」

フィオネを見下ろしながらそういつてのける由理。
ハツタリもいいところである。

俺たちなど、高校で出会い、それから惹かれあい、交際を始めたに過ぎない。

僅か1行で纏まる。血沸き肉踊るような冒険譚など、どこにもないのである。

当然だ、平凡な高校生の恋人同士というのに、そんなものあるはずがない。

俺たちのことなどより、由理の兄の話しでもしたほうが、よほどネタになるっ。

「ねね、空君、といつても、空君だと面白い事いつてくれないしな
」

由理が顎に手を当てて考える。

「話の捏造は無しだ」

「別に空君が実は傭兵だったとか、宇宙人だったとか、素性を隠したトップアイドルだったとか、そんな嘘は言う気ないから安心してよ」

「それ、どれも私が信用できないと思う」

「あら、私は傭兵あたりは、ありえそうかも、と思いましたけれど」
「ほほう、ラミアちゃん、中々センスあるかもね！」

由理が茶化す。

よくもまあ、ロクでもないことばかり言い出せるな、と感心する。

「だって、こんな無愛想なんですもの。裏で人の1人や2人、表情変えずに始末していたところで、違和感ありませんわ」

笑顔でのたまうラミア。

王宮暮らしが続くと、こうなるのだろうか。

「ありやりやりや、ラミアちゃん、私の空君にそれはいくらなんでもひどいよう」

「確かに無愛想だけど、それは言い過ぎだと思っわね、ラミア」
「あら、ごめんあそばせ」

ラミアはまたも口に手を当てる。

こういふ場合の癖なのだろう。

しかしこれは、本題からずれているのではなからうか。

俺たちの過去など、今の話題にする必要はない気がする。

「どちらにせよ、由理が話すと長くなるだろう。それよりも、魔法学校についての説明を受けたいのだが」

俺の言葉に、フィオネは救われたような、由理は気分を害したような顔を浮かべる。

これは、後が面倒そうだ。

「魔法学校は、すごいザックリ言つと、魔法を学ぶ学校ね」

「そんなの私でもわかるよー」

由理が口を尖らせる。まだ不満そうだ。

「それでね、授業はとりたい人が自由にとるシステムなの」

「おお！ それじゃサボりほーだいですな！」

「そんなことでは卒業も出来まい」

「ぶー」

「卒業には、授業のほかに指定の依頼を受ける、って方法もあるわ」

魔法学校には、年中依頼が舞い込んで来るらしい。

学校側は生徒の能力を見極められ、依頼主も安上がりというわけで、困ったことがあると、学校に依頼するのがこちらでは一般的なようだ。

しかし、学校というのを除けば、どこかで聞いたような話だ。案の定、由理が反応する。

「クエストこなしてレベルアップー！ とかそんななの？」

「結構、近いとこいつてるわね。依頼こなしてくと、上の方のクラスにいけるんだ」

「ほへー。期待の巫女さんになんて選ばれるくらいだから、フィオネちゃん達、上のクラスなんでしょ？」

「それが、違うのよね。私とパルスは、色々あって3ヶ月休学で、一切依頼とかうけてなかったからねー」

成る程、先ほどの激甘ベタベタコツテコテラブストーリー（由理命名）のせい、というわけか。
それを悔やんではないようだが。

「年齢は制限されてないから、クラス別で区切られてるのが特徴ね」
「ほう。場合によってははるかに年上の人間もいるわけか」
「うわー、若い子に混じってオジサン1人とか、ヤラシー感じー」
「お前の考え方がな」
「ひっどーい」

由理は機嫌が戻ったようだ。
魔法などという話題でよかった。

この世界ならば、当面由理の機嫌を直すのは楽になりそうだ。

「魔法学校は、大体こんなところだね」
「では、お2人の入学を認めるよう、今から手続きをこちらでさせるよう指示しますわ」
「おお、ラミアちゃんお姫様、って感じー」
「助かる」

では、後はお二人でごゆるりと、と言い残してラミアが部屋を出る。

ちなみに、フィオネは部屋に残ったままである。忘れていたがパルスも。

「そういえば、そろそろ夕食時か？」

窓から空を見る。

どんな世界でも、空が変わることはないようだ。
月が2つ浮かんだり、ということにもなっていない。

「あ、もうそんな時間だね」

「んじゃーさー、フィオネちゃんも一緒に食べようよ。もっと話したい事あるしー」

「そだね。私も由理ちゃん達の事知りたいし。いいよー」

会ってまだそんなに経っていないが、この2人は馬が合うようだ。

口調以外にもシンパシーを感じるところがあるのかもしれない。

パルスはどうするか。その内、起きはするだろうが。

空に浮かぶ月を眺めながら、俺は起こさない事に決めた。

第2話 魔法とはこういうものなのか（後書き）

しばらくは、ストックがあるので更新スムーズにいきそつです。
なくなつてからが恐ろしいですけれど。

第3話 率直に言おう

部屋に夕食が運ばれてくる。

意図的かどうかは分らないが、3人分だ。

倒れているパルスは、給仕にも構われなかった。

そういう扱いを受ける星の元にも生まれしてきたのか。

「あや？ こっちで食べてるものとあんま変わんないなー」

由理の言葉どおり、並べられたのはこちらでいう洋食であった。

パスタやステーキなど、テーブルに皿が大量に置かれる。

これでは豪勢すぎる。

「いくらなんでも多すぎるねー。えっと、ウェイターさん？」

「なんでございましょう」

「ちょっと多すぎるからー、ウェイターさん達で食べていいよー！」

そういつて由理は、皿をいくつか選び、何人が来ていた給仕に渡す。

「しかし、勇者様を歓迎するにはこのくらいは」

「いくら豪華でもねー、食べ切れなかったら意味がない！ だった

ら皆で食べちゃいなよー」

「しかし、それでは」

「私が許可する！ これでダイジョーブイ！」

困惑する給仕。

確かに、運んできた食事を食べる、というのは仕事にはなかるう。

「俺からも頼む。食べきれずに捨てるくらいなら、君達に食べてもらった方が何倍もいいだろう。それに、俺たちはこんな豪華な食事にはなれていない」

「ラミアには後で私から言っとくから。お願い」

フィオネもそう頼み込む。

成る程、巫女というものの価値は、ここでは計り知れないものがあるはずだ。

まして、姫であるラミアの名前まで出されれば、下がるしかない。

「そういうことでしたら。ありがたく頂戴させていただきます」

「そそ、鉄は熱いうちに打て、食事は熱い内に食べ、これ鉄則だよ

ー！

「猫舌のやつが言うか」

「例え出すくらいいいじゃない」

見ると、給仕がどうしていいか分らず、困惑した表情を浮かべている。

「あ、あの？」

「ああ、濟まん。そういう訳だ、君たちにこの分は食べてもらいたい」

俺たちに礼を言って下がる給仕たち。

なにやら、美味いモンが食えるぞー、などと喜びの声が聞こえてくる。

どこでも、下働きというのは、大変ではあるな。

「さて、じゃ、この豪華なでなー、いったただきまーす！」

給仕たちが去ったのを見ると、即座に手をつけ始める由理。
好きなものから適当に口に放り込んでいくので、行儀が悪い。

「ん、ほむほむ、あ、これおいひー！ こっひはどうぶあな、おお、
このははだもいふえふー！」

手元にある小皿によそったりする事もなしに、手づかみでサラダ
を口に運ぶ由理。

その由理の頭を掴む。

「ふいふあつ！ ほはふんはひふふほさー」

「口に物を入れながら喋るな」

俺の言葉に、不満げな表情を浮かべながら、口の中のものを飲み
込む由理。

「ん、ぷはーっ。ひどいや空君。確かにちょっとお行儀悪かったけ
どさ」

「少し、だと？」

「あ、ごめん。ちょっと怖い」

今までその様子を見て、呆気に取られていたフィオネも、ようや
く口を開く。

「空君と由理ちゃんって、仲良いんだろっけど、空君ほとんどそー
いうとこ見せてないよね、まだ」

フィオネにそういわれる。

そんなに冷淡に見えるのだろうか。

「空君はねー、私の覚えてる限りで、私に好きっていった事、5回とないんだよー。付き合つて1年は経つのにー」

「そんなものカウントしていたのか」

「片手の指で収まるくらいだもん」

そして、由理の言葉に驚くフィオネ。そんなに珍しいか。

「パルスなんか、1日に何回も言ってくるんだけど」

「羨ましいなー」

「それはそれで、有り難みがないってどうか」

隣の芝は青く見える、というものだろうか。

この手の事はよく分らんが。

「空君にね、私の事好きだ、とか愛してる、とかいっても減るものじゃないよ、って言ったたら、なんていわれたと思う？」

「減るものであるうとなかろうと、別に構わないだろう、とか？」

「違いまーす。空君はね、言われないからといって、不安になるのか、って言ってきたんだよー」

「え、それってどういう事なの？」

驚愕の表情のまま、フィオネが由理に尋ねる。

俺は本当に珍獣か何かか。

「なんかねー、俺は君の事を大切に思っているから、別に好きだ何だと言われなくても不安にならない。君は違うのかって」

「なんていうか、私とパルスじゃ100年経つてもその境地にはたどり着けないわね」

「そういわれたら私も黙るしかなくってさー。普段アレなのに、たまに恋愛に関して口開くと、爆弾ばっかなんだよー」

「でも、私は分つてても、由理ちゃんほど忍耐強くはなれないかな
」
「空君の彼女やっていると、苦勞はするよー」

それは俺がいう事だ。

勝手にいなくなりかけたり、わけの分からん事を言ったり、兄と
一緒に色々たくらんでみたり。

「はは、空君の苦勞も相当だと思っけどね」

フィオネもそう感じるようだ。

会って半日程度のフィオネがそういうくらいだ、俺の苦勞がいかに
ばかりなものか。

「えー、そーかなー？ 私みたいな元気で素直で優しく可愛いわ
女なんて、空君みたいな人だと、探しても見つけれないと思うよ
」

「可愛いかどうかは知らんが、そうだな」

「え、そこ認める！？ 認めるの！？」

フィオネと由理が同時に驚く。

由理が自分でいう事かどうかはともかくとして、大体あっている。

「フィオネはともかく、由理は自分からいつてなぜ驚く」

「いや、認めると思わなかったからさー。それにしても、本当に爆
弾投下するの得意だよ、空君」

「由理ちゃんの言葉流すと思っってたし、私も」

成る程、確かにいつもなら流していたような言葉だ。

一理ある。しかし、爆弾爆弾と、俺は危険物ではない。

「だが、事実だからな。俺にとっては、由理に出会えたことが奇跡のようなものだ。本当に愛する事ができる者に出会うことができ、共に生きていけるのは、奇跡のような確率なのだろう」

顔を真っ赤にし、目を丸くしている2人。

今の俺の言葉が原因だろうか。

何かおかしいところでもあったか。

「あ、あ、うん。空君。その、うん、なんだろ。なんていうか、空君、やっぱり私に愛してる、とか日常的に言わなくていいよ」

「なんていうか、その、普段言わなさそうな人が言うと、心臓に悪い、ね」

フィオネも由理もなんだというのだ。

特に由理は、言う回数が少ない、などと不満げだったではないか。随分と勝手な話である。

「それにしても、良くそんなこと真顔で言っていけるよね。パルス見てるとなんだか感心しちゃうわ」

「俺はいつでも真面目だ」

「普通は、顔赤くなったり、恥ずかしくなったりするものだと思うな」

フィオネの言葉に、由理も同意する。

もつとも、由理はフィオネに続けて、「だから空君なんだよ」などと教えているが。

俺は解説が必要なのか。

「よく分からんが、大方の人間は、顔を赤くしたりしながら言った

りするものなのか？ 俺の言葉は「

「顔色変えずに、っていうのは本当に珍しいと思うな」

「だが、大切なものを大切だという事のどこに、恥ずかしいと思うことがある」

「うう、そういう事を堂々と言えちゃうのが、なんか凄いなあ」

フィオネが今度は感心している。

俺はいつでもこの通りだが。

さて、感心されるような部分はあっただろうか。

お手元のフリップにお書きください。

「なんか、これ以上空君に喋らせると、私達の心臓持たない気がする」

唐突に由理が言い出す。

元を辿れば、由理辺りが振ってきたのではなからうか。

そしてそれに同意するフィオネ。

そうだ、最初はフィオネだった。

「ここまでとは、予想外だったわ。後で、パルスに聞かせたいくらいね」

「君とパルスも十分仲がいいように見えるが」

「そうだよー、フィオネちゃん達ラブラブに見えるよー」

その言葉に頬を赤らめながらも、満更でもない様子のフィオネだったが、すぐに表情をやや険しくする。

「もう、いつものことで慣れちゃってるけど、こいつが目の前で女の子口説くのは、やっぱり気に入らないわね」

パルスを指差すフィオネ。

由理は口に人差し指を当て、しばし考え込む様子を見せる。ちなみに、この場合の由理は、最初から答えが決まっている。所謂ポーズというやつだ。

「どうか、フィオネちゃんも空君みたくスルーしちゃえば。私は誘いに乗る立場だけだ」

「それってパルスだとますますひどくなるんじゃないかな……」

「前ね、空君がちよっと目を離れた隙に私が男の子に声をかけられた時、例によつていいよーっていったら、ちよつどその時空君戻ってきた事があつてね」

そういえば、そんな事もあつた、と思い出す。

あの時は確か、ふむ。特段おかしい事はしなかつたはずだ。

「で、空君戻ってきて、声かけてきた男の子は『こんな無愛想な彼氏より、俺たちとお茶いこうぜ』とかいってたんだよ。で、空君どうしたと思う？」

「追い払つたり、じゃないわよねー」

「空君はナンパ男達に、『由理の新しい知り合いか？ ならば、どうだ、由理だけでなく俺も含めてお茶でも。ちよつどいい店を近くに知っている』って言ったんだよね。流石に、ナンパ男達も毒気抜かれて、平和的におさらばー、だったよ」

「それ、相当の上級者じゃないと無理ね。っていうか、空君が特殊すぎるだけじゃない？」

「ありや？ やっぱそう思う？」

あの時の俺の行動はおかしかったのだろうか。

恋人の知り合いとあれば、俺も人となりを知っておくのは重要なはずだが。

そのために、共に喫茶店に行こうという提案をしたにすぎん。

「そういえば、なぜあの時彼らは唐突に消えうせてしまったのだ？」
「それ、普通なら疑問にならないよ、って思ったけど、疑問にならないならそういう言葉出てこないよね」

フィオネの視線の感心の度合いが、ますます強くなる。
少々居心地が悪い。

「あー、フィオネちゃん、さつきからずっと空君見てるー！ もしかして浮気！？ パルス君にととう愛想尽かしちゃった！？ でも、パルス君現在お休み中だよ？」

由理がまた茶化し始める。

「違うわよー。パルスも、空君とまではいかずとも、もう少し浮ついたとこなくしてくれればな、って思ったの」

「やつはあれはあれで、見かけほど浮ついてはいないと思うがな。その証拠に、君と入る時、意識の中心は君に向けられていた」

「うーん、それは分るんだけど、って、空君なんで知ってるの！？
ってか、鈍いよね、そういうの絶対！」

フィオネ、お前もか。なんなのだ、誰も彼も。

皆、口をそろえて俺を鈍いとは。

そんな鈍間ではない。

「誰が誰に意識を向けているかくらいは分る」

「いや、確かにパルスも私の事大切に思ってくれてるのは分ってるし、私もパルスの事大好きだけど、って何言ってるの私！ 恥ずかしいー」

赤くした顔を手で覆うフィオネ。
恥ずかしいなら言わなければいいのだが。
今の言葉のどこが恥ずかしいかも分らん。

「空君空君。普通これが愛してる、とか言ってしまった人の行動なんだよ？」

「そうか。成る程、いささか俺は特殊だというのは理解した」
「いささかつてレベルじゃない気もするけどね……」

苦笑いする由理。

何度も言うが、俺は凡人である。
変人に類するのは、間違いなく由理の兄であろう。

「しかしフィオネ、君も自分で言っただけで恥ずかしくなるくらいなら、言わなければいいと思うのだが」

「人間、言ってしまうってこともあるわよ……」

落ち着いてきたらしいフィオネ。
その息を整えるためか、彼女は紅茶をすすする。

「ふう……」

「あ、落ち着いたみたいだね。フィオネちゃん」

そして、由理がそれまでの軽い雰囲気から変わり、フィオネの目を見据える。

なにか、言おうとしているのだろう。

「ねえ、フィオネちゃん。空君がさっき言った事、覚えてるよね」

その言葉に、再び頬を赤らめるフィオネ。

「う、うん」

「空君はね、きつと、人一倍、その思い強いと思う。フィオネちゃん、家族の人は好き？」

目を伏せるフィオネ。何かあつた人間の目だ。

「お爺ちゃんならいるよ。お爺ちゃんは、私を育ててくれた、とても大切な人」

「ご両親は？」

「生まれてすぐに、ね」

ただ、家族を亡くしたという実感はないような響きだ。物心付く前なら、無理もないが。

「それじゃ、悪い事聞いちゃったかな。でも、それなら多分、今からする話は、分かってくれると思う。空君もね、そついう事があつた人なの」

「それつて、空君は誰か家族を、亡くしてる、つて事？」

その問いには、俺が肯定する。

亡くしたのは、俺の姉だ、と。

俺に関する事だから、当然だ。

「空君は、さつき言った事を、恥ずかしい事だと思つてないのは、多分、心からそつ思つてるからだと思う。そつだよね」

「ああ」

それは、偽りのないことだ。いつでも偽りはないが。

恐らく、この世界の星の海にも、姉さんはいるのだろう。
だからこそ、大切な人たちと生きているという事を奇跡だと思えるのだが。

「気恥ずかしい言葉かもしれないけど、でもね、フィオネちゃんは、パルス君を大好きなんですよ？」

「うん」

「お友達も、大切なんでしょ？」

「うん」

「パルス君だけじゃなくてね。そのお爺さんや、フィオネちゃんのお友達。そんなフィオネちゃんの大切な人たちと生きていられるって、それだけで、小さいけど、考えられないくらいの幸せだと思う」

由理の言う幸せ。

それはかつて、俺が自ら捨てようとした幸せでもある。
だからこそ、その輝きの眩しさを知っている。

いかに特別な輝きかということも。

「忘れがちになる幸せだが、それは何者にもかえ難い。その時間も与えられない人だって、大勢いる」

「分るよ、由理ちゃん、空君」

「だから、パルス君とは、何があっても仲良くね！」

「大丈夫だとは思うがな」

フィオネは由理の言葉に、静かに頷く。

自分の与えられている時間、その価値は何者にもかえ難い、その事を改めて認識したようだ。

だが、フィオネが顔を上げる。俺たちに聞く事があるようだ。

「それ、なんでパルス起こしてから言わないの？」
「なんていうか、いいいたいことにたどり着く前に、脱線しまくっちゃいそうだったから。私が」

至極納得のいく説明を受けた表情を浮かべるフィオネ。
確かに、これ以上の説明はあるまい。

「あ、もう遅くなってきたかな。私、そろそろ帰らないと」

席を立つフィオネ。

部屋を出て行くこうとするところで、俺が呼び止める。

「え、何？」

「忘れ物だ」

未だ、入り口付近で倒れたままのパルスを指差す。
フィオネはどうやら、パルスを起こしにかかるようだ。
頬を何度もはたく。

「ほら、おきなさい！」

由理はそれを見ながら、わお苛烈ー、などと騒いでいる。
なぜ楽しそうなのだ。

「ほ、ほへ？ あ、フィオネおはよう。何？もしかして俺が愛し
くなくなった？ もー、君の愛は炎のように激し」
「色々いいたい事あるけど、もう遅いから、とりあえず部屋に戻る
わよ」

パルスの言葉をさえぎり、ひきずっていくフィオネ。

相変わらず仲のいい事だ。

フィオネが部屋を出て行く際に、何かを思い出したように俺たちに顔を向ける。

「あ、言うまでもないかもしれないけど、2人きりだから。仲良くね」

そういつて意味ありげなウインクをして去っていく。
どういふことだ。

戸のしまる音が、夜のしじまに支配された室内に響く。

そろそろ明かりを消すか。

と、由理が隣で何かを期待するような顔をしている。

それはいい。

流星に、色々あったので、多少疲れた。

寝室に向かう。ベッドに入る。

これも相変わらずの上物だ。

シーツの肌触りがいい。

由理も同じベッドに入ってくる。

風が寒いので、抱き枕代わりにすると、ちょうど暖かくなった。
何事か騒いでいるが、まあいつもの事である。

.....。

なぜか忘れた事があるような気がする。

ああ、まだ明るい。明かりを消す。

こうなると、月明かりだけが、わずかに室内を照らしている。

「ねえ空君。他に何か忘れてる事ない？」
「ふむ」

ああ、風呂の場所を聞き忘れた。

「助かったぞ。思い出した」

だがこれは、明日聞けばいいか。

今日は寝るのが先決だ。

なぜか由理が少々暴れまわったが、まあ、いつもの事である。
とはいえ、寝るときくらいは落ち着け。

第3話 率直に言おう(後書き)

素直クールって最強ですね！ うん、最強です！

一番恥ずかしくなるのは作者だと言っつのは黙っておくべき事ですよ。

第4話 魔法学校

翌日の朝。

パルスにラミア、フィオネの3人が、部屋に入ってきた。朝食もこちらでとるといふ。

その3人の顔を見ると、朝起きて以来、なにやら不機嫌だった由理の機嫌も直っていた。

なぜ不機嫌だったか理由もまったく分らなかったので、助かる。

「お2人も、今日から魔法学校に通い始めるのですね」
「ああ」

由理はすでに、魔法学校の教室はどうなってるか、などと期待に顔を輝かせている。

この様子なら、しばらく退屈はしまい。

3人とも、この部屋で朝食をとるといふ。

「つつわけで、この仮面野郎を置いといて、俺の空いてる左手を繋いで俺と登校しようぜ、由理ちゃん」

「右手は？」

「もち、フィオネで両手に花よ！」

「よし、乗った！」

そこまで言ったところでフィオネに頬をつねられる。

どうせのことだ、他のパターンも用意してみたらどうだろうか。

「まったく、あんたはどうして堂々と私の前で他の子口説く訳!？」

フィオネが答える。

「魔法学校って、クラスでランク分けされてるんだよね」

「うん」

「私達って勇者様だから、いきなりトップランクとか？」

その由理の言葉は、ラミアによって否定される。

「それはありませんわ。魔法学校では、魔法学校でのルールに従っていただきます」

その事実によ理は機嫌を損ねるか、と思いきや、違うようだ。

「おおー！ それだと、フィオネちゃんとかパルス君と同じクラスだねい！」

確かに、同じクラスに知り合いがいるのといないのでは、大分違うだろう。

この2人ならば、信用できる。

「わからないことあったら、私に聞いてね。由理ちゃん、空君」

「パルスも頼らせてもらおう」

「えー」

由理が頬を膨らませる。

パルスと散々楽しそうにしている、その反応はなんなのだ。

「変態さんに質問すると、お礼は体でー、とかいわれそー」

「バレちまってるようだな！ なら、げっへっへっへっへっへ」

パルスが気味悪い笑いを浮かべていると、いきなり呻く。

「つま先はいてーぞ、フィオネ！」

「アンタこそ、何朝っぱらから変な事言ってるのよ」

「痴話喧嘩だー、夫婦喧嘩は犬さえ食わぬー」

由理が指差しながら、2人の様子を茶化すと、フィオネの顔が赤くなる。

時間が心配だ。2人のやり取りを見ながら、俺は目の前の食事を片付けていく。

「フィオネちゃん、何顔赤くなってんの？ あ、やっぱ俺の事本当は旦那さんだっと思ってるんだ、うれしーね！」

「ほうほう、フィオネちゃんは普段あれだけパルス君つねるのに、夫婦って言われると、顔赤くしてダンマリだねー。ツンデレツンデレー！」

「由理ちゃん、フィオネがツンデレってそれってどゆ意味？」

「普段ツンツンしてて、中々寄せ付けないけど、何かの拍子でデレちゃう子の事ー」

由理が自ら説明する。

ロクでもないことに時間を費やしているとしか思えない。

しかも律儀に、パルスは由理の言葉を受けて、話を繋ぐ。

「そ、そ、そーいうのじゃないわよー！」

顔を真っ赤にして否定するフィオネ。

ふむ、このパン、かなりの逸品だ。

何もつけなくても美味い。

「そうですね。フィオネとパルスは、年中ベタバタですわ。周りに
いけば、シュガーは不要になりますわ」

「それはブラック派には辛いな。原理は謎だが」

紅茶をすすする。

味に変化はない。ただの脅しか。

「ですが、温度もあげた上でベタバタなので、節約にはなりません
わね、結局」

別段温度が上がったようには感じられない。

ラミアもどうかしている。

それとも、コーヒー限定で作用するのか。

「な、俺がこんなやつと一年中ベタバタだよ！」

「私がいつこんなやつとベタバタしてるっていうのよ!？」

ラミアの言葉を今更になって否定する2人。

出だしから終わりまで、綺麗にタイミングをそろえている。

合唱でもやればいい線いくだろう。

ああ、バターをつけても、それはそれで別の美味さがあるパンだ。

「ベタバタよりボコボコだもんね、パルス君」

「その通りだけど、それひどくね!？」

「どこがその通りなのよ!」

「コーヒー、ちょうどいい甘さですわね」

む、コーヒーもあったのか。

後で試してみる価値がありそうだ。

それはともかく。

「魔法学校の制服はあるのか？」

その俺の問いを待っていたらしいラミア。どうやら、前もって用意していたらしい。といっても、黒いマント1枚ずつである。

これを羽織れ、ということのようだ。

「これが、魔法学校の生徒の証、になりますわ」

黒いマント、というと由理の反応は大方予想できる。

「おお！ これはトロンベカラーのマント！ これって校章？ うーん、このエンブレム、軍人の名門の家紋とかにできないかな？」

「駆け抜けるにはまだ早い」

「何その複合ツッコミ!？」

どちらにせよ、校章を制服から抜くなどありえまい。

やはり時々アホだ。

「なんか、気に入ったみたい、だね」とはフィオネの言葉である。

恐らく、頭の中の魔法使いっぽい事に喜んでいるのだろう。

嬉々としてマントを羽織った由理の姿を、興味深げに、ラミアは見ている。

「何か気になることでもあるのか？」

「ここ、ここなのですが」

ラミアが示す先には、黒の中にハッキリと、銀のラインが浮かび上がっている。

それを見て、パルスもフィオネも驚いている。

「由理ちゃんは、本当に伝説の勇者、かも」

「確かに、こいつはマジ、かもな」

3人の驚き方に、流石にいくらか身構える由理。

自分が勇者、といわれた事にもまだ喜びを見せていない。

「このラインってね、持ち主の得意系統に反応して色が変わるんだけどね」

「赤なら化術、青なら理術、緑なら生術がそれぞれの適正になりますわ」

「あれ、銀色ってどこにもないじゃん？」

「……………まさか。」

幻系統は、失われた存在、と言われていた。

そして、誰も見たことがない銀色。

もし、風化するほど昔の習慣となっている勇者伝説の勇者が、本当に幻系統を使用していたとすれば。

それは、誰も見たことがない色となって浮かび上がるはずだ。

見たことがない、とは、何も新しいものだけではない。

風化し、人々の記憶から掻き消えたものも、同様に見たことがないものになる。

「由理は、幻の系統だと、その可能性があるというのか」

まだ食事が終わっていない、と。
遅刻するよりはマシだ、と、支度をさせる。

この食事は、また、給仕たちに食べてもらおうとしよう。

「空君だけなんで普通に食べてるのー!?!」

「お前達が、なにやら騒いでいる間に食べさせてもらった」

「ちくしょー！ てめ、吐きやがれ!」

そんな勿体無いことはできん。

それに、くだらない事で時間を使っくくらいなら、学校へ向かった方が余程生産的だ。

騒ぐパルスを見て、気がつく。

確か、理術の適正者は青だったはずだ。

「パルス、なぜ君のラインは緑なのだ？」

「あ？ これか。ま、学校だと俺は生術使いだからな」

要するに、視覚を錯覚させる事ができる理術の力で、青を緑にみせかけているのだろう。

便利な能力である。

恐らくは、自分とエリアを結びつけるものを極力排除するための措置のはずだ。

歌姫エリアが、実はこの男だったとなれば、その日からどうなるか知れたものではない。

「成る程」

「空君、察しがよくて助かるよ」

フィオネに言われる。

由理の心中を察する事に較べれば、この程度なんて事はない。

「おいフィオネ。俺の前でこんな無愛想野郎に手をつけるつもりかよ」

「あんた、よくそんなこといえるわね」

「夫婦漫才もいーけど、急がないと遅れるよー？」

その言葉に、パルスもフィオネも走り出す。

今は、顔を赤くしている暇もないらしい。

俺たちも、後を追う。

「にしても、系統まで変えるってやりすぎじゃない？」

由理がパルスに聞くと、フィオネから答えが返ってきた。

「そうでもしないとね、この馬鹿はすぐにバレそうだからね！」

「おい、ありや偶然だ偶然、運が悪かったただけだっつーの、ってや

べー！ もうこんなこと言ってられる距離じゃねえ！」

なら、叫ぶのもやめたほうがいいと思うが。

なににせよ、俺たちも教室に駆け込む。

入った瞬間に、視線が俺達に集中する。

クラスのそこかしこから、騒ぐ声が上がった。

「あれ、勇者様！？」「2人、2人なんだよな！」「くー、まさかのカップルかよ！？」

「キヤー、なんか渋い！」「思ったより、男の方は地味ね」

そして。

「なんでフィオネとパルスが仲良さそうなんだ」という声も聞こえてきた。

この2人と仲がよくて悪い事でもあるのか。

「ねーねー、パルス君、フィオネちゃん。もー急ぐ必要ないから、夫婦漫才やってよー！」

それだけで、教室中が静まり返る。

パルスもフィオネも沈黙状態だ。

ややあつて、パルスが動き出す。

「フィオネ、ここは勇者様のご期待に沿うとしようでは」

「あんた馬鹿？　ってというか由理ちゃん、私達夫婦じゃないし！」

いち早くいつものやり取りを繰り広げるフィオネとパルス、そして由理。

「そんな照れなくてもいいよん！　見た感じ、結婚とか確定事項だよな。ラブラブオーラが出まくりなのだー」

伝説の勇者様の言動に、目を丸くし、口をあけたまま見ている生徒達。

どう考えても、予想していたのとは違っていたらう。

いや、よくよく考えたら、召喚された時点での言動で、察する事は出来たはずだ。

にもかかわらず、呆然としている。
余程強烈だったようだ。

「馬鹿ばっか、だな」

この光景は、こう表すしかない。
食いつく由理とパルス。

「ちょっとー、馬鹿ばっか、ってどーいうことー!? それに、その言葉使つていいのって可愛い女の子限定だよ!」

「おい、無表情野郎! てめ、俺の事馬鹿つていったな!？」
「これまでの言動を思い返してみろ」

口をつぐむパルスに代わり、フィオネが入ってくる。

「まあ、これまでのとこだと、確かに、馬鹿っぽく見えるわよ、あんた」

「う、そりゃそーかもしんねーけど、ひでえ」

「えー、でもパルス君、実は有能ー、とかそーいうタイプだよ。金髪碧眼のドイツ人スナイパーみたいに!」

確かに、由理の言うとおりだろう。

第一、本当に馬鹿なら、自覚がないので余計に騒ぎ立てるはずだ。
ちなみに、馬鹿は馬鹿でも、突き抜けると天才になる。
俺はそんな男を知っている。

「おお、由理ちゃんやっぱわかってるー! そそ、俺は実は超有能な天才なのだ!」

「そういうところが、そう思われる原因じゃない」

「フィオネ。俺のフォローに回ろっ、とかそういう気はなしかよ?」

「いや、事実だから」

落ち込むパルス。

見ると、教師もどうしていいか分らないらしい。

いつの間に来た。中年男性が、頭をかきながらこちらを見ている。

「あー、そろそろ、始めてもいいですか？ あんまりやりたか
ないが、あたしも仕事なんでね」

「ごめんなさい。パルス君が私にしつこく構う」

「元はといえばお前のせいだ」

「え、フオローなし？」

「事実だから」

先ほどのパルス達と同じやり取りをする。

その言葉を合図と悟ったか、パルスも由理も静かになる。

「じゃ、パルス君とフィオネさんは、席について。君たちはこっち」

そういつて、自分の隣を指差したので、それに従う。

生徒達も、流石に教師が来ているので、静かになっているらしい。

「それでは、今日は新しいお友達を紹介するとしましょうかな。召喚の儀式で召喚された、勇者のお2人です。はい、拍手」

われんばかりの拍手が起こるが、名前を紹介されていない。

頃合を見計らって、「はい、そこまでね」。後はお2人から」と、自己紹介として俺たちに丸投げしてくる。

俺からにするか。

「緒川空だ。空と呼んでくれていい。先に言っておくが、勇者又は勇者様とは呼ばないで欲しい。そういう呼ばれ方は好きではない」
「勇……空さんの趣味はなんですかー？」

その質問に答えようとすると、中年教師が、「質問は後で好きなようにさせるから、ちょっと待っててもらえますかな」と制した。

次は、由理の番である。

何を言い出すのか。

「はいはい！ 私が勇者として召喚されたい、青空由理です。由理って呼んでね！」

これで、本来ならば自己紹介は終わらせていいだろう。

もっとも、由理がこの程度で終わらせるとは思えないが。

「あ、空君は嫌がつてるけど、私は勇者様、とかでも全然おっけー！ むしろ大歓迎？ 後、覚えている人も多いだろうけど、空君の彼女です！ よろしく！」

流石に、俺とは真逆に近いようなテンションでの自己紹介である。生徒達もなんやかんやと騒ぎ立てるが、再び教師が口を開く時は、静かになっていた。

規律はしっかりしているらしい。

「さて、空君、由理さん。私はこの担当のジオルジオ・バッジオです。ここにきたのも何かの縁、まあ、気楽にきなさいな」

別に召喚された事を気にかけていないのは、すぐに分るはずだが。そついう事に疎いのか、はたまた気にしないような男なのか。

「では、皆さんも、この新しいお友達と仲良くして下さい。あ、それと、今から質問コーナーです。お2人さん、がんばんなさいな」
そういつて、バッジオが俺たちの肩を叩く。
何かに備えるという事が。

隣の由理は、何に備えるか分つたような表情をしている。
成る程、質問責めに備えているようだ。

俺は、そういうものは苦手だ。

「さつき、聞きそびれちゃったから、改めていきますよ。空さんの趣味はなんですかー？」

「読書、だな」

俺が極めて簡潔に質問してきた女子に答えると、由理が極めて不満そうな声をあげた。

「ちょっとー、空君だけじゃなくて、そーいうのは私にも聞くものだよー！」

頬を膨らませている。

その様子に、若干困った表情を浮かべる質問者。

普通の反応だ。

それでもなんとか頭を落ち着けたらしい、その女子は、由理にも同じ事を聞く。

「良くぞ聞いてくれましたー！」

芝居がかかる由理。

自分から聞けとっておいて、なんなのだ、この女。

「アニメと漫画とゲームとネサフです！ あ、カードゲームも！」

顔に疑問符を浮かべる生徒達を無視して、更に続ける由理。

「あー、ざっくりまとめちゃお！ サブカル全般です！ ブイ！」

まったく通じるはずが無かろう。

実際、教室中の時が止まっている。

「いやー、私も年だからね。最近の子の流行りは分りませんなあ。これは、勉強しないと」

バジオはそういうが、そもそもこの世界に由理の考えるサブカルチャー自体がない。

はやりでも何でもない事は、生徒の反応を見ればそれこそ分るはずであるのだが。

もともと、この状態をなんとかするために一言入れた可能性もある。

この男もまた、読めない。

さて、この後に来る質問にはどう答えるか。

何を質問されるか予想できない俺の心配する事ではないな。

「次の質問がある人、いるかね」

バジオが手を後ろに組んで聞く。

どことなく、ロス市警の刑事を思わせる。

「誰か、いる？ いたらこつする」

そういつて右手を上げる。

やはり、あの刑事を思い出す。

「おー、いたようだね。よろしい」

「なぜお二人はパルスやフィオネと仲が良いんですか？」

パルスがエリアであることは言うてはいけない。

となると、フィオネが巫女であるところから、話していけば良いのだろう。

頭の中で話を組み立てていると、隣の由理が答え始めた。

第5話 結局彼はなんなのか

「なんでフィオネちゃんやパルス君と仲良くしてるの、だったよね？」

由理が質問者に聞き返す。

「は、はい」

「そりゃ勿論、フィオネちゃんとパルス君がいい人だからだよー」

答えが曖昧すぎる。

「というか、昨日今日での事であるから、実際のところ答えになっ
てすらいない。」

「この短期間で、いい人がどうかを判断するには早いと思われるだ
ろう。」

「それとー、まあ、召喚された日に色々助けてもらったからねー」

由理の言葉に騒然となる教室。

「パルスはともかく、フィオネも巫女であることは知られていない
のが原因のようだ。」

昨日、俺達に関わったのは、巫女と給仕だけである。

教室の空気を俺同様に感じ取る由理。

「ありゃ、これはもしかして驚愕の事実ってやつですか？ そう
です、フィオネちゃんは、化術の巫女なのですよー！ きゃ、スゴ
ーイ！」

「ちよっと、由理ちゃん！？ それ私から言おうとしたのに！」

「まー、いーじゃないかー。魔法少女で巫女さんって、すっごい萌

え属性だよー、いやん!」

教室中が、フィオネが巫女だという事実には驚愕する。パルスともども、そういえば落ちこぼれの方に入っていたような事を言われたいたと思ひ出す。

成る程、驚くはずだ。

「そ、それって本当なんですか!?!」

「うん、ホントだよー。んで、パルス君はその巫女様の彼氏さんだから一緒に仲良くなったのー」

フィオネと同時にパルスが出るのは、誰も疑問に思わないらしい。パルスがエリアであるという事は、由理も黙っておくようだ。

「あー、そうそう、エリアちゃんて子とも仲良くなったかなー。あの子、歌すっごく上手いよねー」

さりげなく、パルスとエリアを別人として扱う由理。パルスとフィオネが、由理に感謝の視線を向けている。

しかし、歌姫と仲良くなるとは、事情を知らないものから見れば、役得以外の何者でもなからう。

「由理ちゃん、それ役得だけ? あの歌姫エリアちゃんと仲良くなるなんてよ。なんかこう、淑女、って感じでいいよねー、誰かと違ってよ」

そういつてフィオネを見るパルス。

どうすればいいか察知したのだらう、いつものようにはじめる。

「私の事、淑女じゃないって言うのかしら？」

「すぐに暴力を振るうやつのが淑くて、また耳つね、いってえええ！」

「おお、やっぱり夫婦漫才見せてくれてるねー！ いいぞー、浮気者には制裁だー！」

由理が囁し立てる。

本当に昨日からずっと、同じような事をやっている。よく飽きないものだな。

こういうときは、教師が止めに入るはずだが、その様子もない。バツジオの顔をしばらく見ていると、俺の視線に気がついたようだ。

「ウチの嫁さんがね、働け、働いて稼げ、ってそればかりでねえ。あたしも休める時間は多い方がいいから、この2人は好きにさせるの。いやー、しかし、若いっていいねー」

それでいいのか。

これで有能なのかもしれないが。

「あなたもそう思うでしょ？ あ、まだ君も若かったかー。いやいや、失敬、雰囲気が大人数びてたんでつい」

バツジオがそんな事を言っている間に、話題は別なところに移っていた。

パルスが軽く燃やされたところで、落ち着いたらしい。

「そういえばフィオネ、私達もお祭り見たけど、あんたが巫女だったなんて、全ッ然分らなかつたわよ？」

「いやそれよりも、3ヶ月も休学したと思ったら、次は巫女って何!?」冗談でももっとマシなの考えてよ!」

「フィオネさん、すごいです。ここ、最低ランクのクラスなのに」

「フィオネ・グリネン、どのくらいお偉いさんに払ったのです!？」

「まさか、体で、とか、じゃない、わよ、ね」

相当な言われようだ。

それにしても、女性に肉体労働を報酬として要求するとは、この世界はやはり異世界らしい。

「ちよつと、私の事なんだと思ってるのよ、皆! いや、確かにちよつとは化粧してたけど、巫女はその、試練を乗り越えた末なんだから!」

「化粧つて、ちよつとくらい、なの? 付き合い長かった私でも分からなかったんだけど」

それらの言葉に反応したのはパルス。

相変わらず、女性の言葉への食いつきは早い。

さつきまで燃やされていたはずだが。

「驚くだろ、アイラちゃん。化粧での誤魔化しはそーとーだったかな。化粧中は、俺でも分からないくらいの美女だったぜ」

化粧といえば、パルスもしている。

コチラの場合は、性格やしぐさの部分まで覆い隠されているが。

「ちよつと、それってどういう意味よ!？」

「そのまんまの意味だろ。つつつか、気づかずにナンパするところだった」

その言葉に「もう一度燃やされたい？」と返すフィオネ。
成る程、昨日からまったく変わらん。

「怖いなあ。そそ、巫女が彼女って役得だよな。エリアちゃんにも
声かけようとしたんだが」

「へえ、歌姫にも手を出そうとしたんだ」

「ガード固くてよ、警備員に追い出された」

涙混じりに語るパルス。

人気の歌姫を演じているくらいだ、この程度の演技は朝飯前だろ
う。

それにしても役者だ。

「警備員さんも、悪い虫が分るみたいね」

「おい、仮にも俺、お前の彼氏だろ？」

「別の女口説こうとした話持ち出して何が彼氏よ」

「あ、ヤキモチだー、やっぱりラブラブ感漂うねー！」

由理が今朝のように茶化す。

ややこしく持っていくな。

「ラブラブとかじゃないわよー！」

「ラブラブとかじゃねーよー！」

やはり合唱向きだ。

息が合っている。

シンクロナイズドスイミングでもいいかもしれん。

「おおう、やっぱりナイスユニゾン！ フィオネちゃんあれだよ、
浮気者には制裁を」

再び騒がしくなったのは教室内である。

その多くは、フィオネの拳の破壊力に対する恐怖の言葉だった。

しかし、由理は賞賛の言葉をかける。

「邪悪な浮気者！ その際限のない欲望を彼女の鉄槌が打ち砕いたのだー！ すごいぞー、かっこいいぞー！ フィオネちゃん！」

勇者の威厳も何も、あつたものではない。

しかしまあ、俺以外の誰にも分からないのに、よくもやり続けるものだ。

もしかしたら、（由理の言う）布教でもする気かもしれん。

「まったく、君も巫女のようにおしとやかにしていたらどうだい？ エリアさんのような可憐さが欠けているね、美しくない」

誰だか知らないが、教室の入り口の方に男が立っていた。

これ見よがしに髪をかきあげる。

「君は誰だ？」

「な、僕を知らないのか！？ フン、似非勇者め。無礼にも程がある。まあいい、無知な君たちに特別に」

「彼は誰だか知っているか？」

長くなりそうなので、パルスとフィオネに向けて聞く。

「あー、そいつか」

「勇者役のユース君」

それで俺達を似非勇者と言ったのか。

「な!?! 本当に無礼だな!」

「うーん、確かに噂どおりのイケメンだねい、ハズ君」

由理はユースの容姿をじっくりと観察し、口元に笑みを浮かべ、指差しながら言う。

この笑みの時は、大抵ロクでもない事を考えている。

「ハズ君とは誰だい? 僕の名前はユース。ユース・ノヴァースだ。美しい名前だろう?」

「だって、あだ名だもん。勇者になるはずだった人だからハズ君」

即座にあだ名をつける由理。

あんまりなあだ名である。

しかも、生徒の一部がクスリ、と笑う。

「な、な、な……この僕を、そんな美しくない名前で呼ぶなんて!」

「えー、だってフィオネちゃん馬鹿にするんだもん。それに」

「そ、それに?」

気のせいか、顔が引きつっている。

「かませっばいし。あ、なんかね、初登場の時から、かませ全開の気もする。マス君でもいい?」

「かませ犬、という意味か」

「そゆこと」

実にあんまりの上、なんのひねりもない。

だが、こんな短時間であだ名2つなど、この男、相当である。

「ま、ます、ます、ますます……」

「顔はいいけど、うーん。残念なイケメンけつてーい！」

指を差しながら、トドメとばかりに宣言する由理。

だが、イケメンの意味を生徒は知らない。

すると、由理が「イケメンとはー、美形の事でーす！ 豆知識。

やったね、また1つ賢くなったよ！」と叫んだ。

由理のイケメンの説明に、「残念な美形」という意味だと悟るー
同。

その言葉で、再び笑うものが出てきた。

しかも、先ほどより数が多い。

その反応に居心地の悪さを感じたのだろう。

「僕をかませなんて言った事、後で後悔させてあげるから！」とい
いつつ、駆けさつてしまった。

一体、何だつたというのだ。

「ふう、典型的かませだつたね、ハズ君」

かませ犬なのはわかつた。

だが、結局のところ何のために来たのかは、分ならずじまいであ
る。

物語かなにかであれば、顔見せというものになるのか。

顔見せに当たるのがあれだとすれば、相当扱いはよくないはずで
ある。

可哀想な事だ。そのためだけに出てきたのか。

「結局、ユースは何しにきたのだ？」

すると珍しく、パルスが答えた。

「あー、あてつけじゃねーか？ ほら、お前へのよ」

「俺へのあてつけ？」

「勇者役やるはずだったのに、お前が出てきてパーだぜ、っていうよ」

「ただの逆恨みか。器が小さいな」

なるほど、これではかませ犬になるわけだ。

俺たちが勇者として呼ばれたことなど、不可抗力だったので仕方あるまい。

「中々、ズバっというね、空君」

フィオネが苦笑いしながら言うと、由理が続く。

「空君は、うん、天然のドSさんだからねー」

「ドSって？」

「人をいぢめたがるってことー。天然さんは、知らないうちにいぢめてるってとこかな」

俺がいつ人をいぢめているというのだ。

そんな加虐性あふれる人間ではない。

誤解を生むようなことを。

「あー、確かに」

「分かる気がするぜ」

なぜか納得するフィオネとパルス。どういうことだ。
いや、納得したのは2人だけではない。クラスの全員が納得した
空気である。

失礼な反応だ。

「あー、空君に由理さん。そろそろ、授業始めてもいいですかな？
一応、私も言われた分は働かないといけないんでね」

言葉とは裏腹に、もう少し騒いでくれているもよかったのに、と
いう雰囲気醸し出すバツジオ。
やる気は微塵も感じられない。

「さてまあ、今日もお給料の分くらいは働くとしましょうかなあ」
ゆっくりと肩を慣らし、腕を回し、それから欠伸をしたあと、よ
うやくこの中年教師は教室を見回す。

生徒達は、見慣れた光景なのか、それを見ても騒ぎ立てたりはし
ない。
なんとなくだが、能力がある男のようだ。

「ええとじゃあ、今日の授業は、うーん、リクリエーションといき
ましようか。親睦会。まあ、新しいお友達が来たんです、必須でし
よう」

「おお、先生わかってるねえ！」

由理が満面の笑みを浮かべる。

この分かっているね、はお約束が分かっているね、の分かっているね、
だ。

初めて会ったときから2年は過ぎ、流石にその程度は分かるよう

になっている。

「へへへ！ 公然と由理ちゃんにお近づきになれるチャンス！」

すっかり聴きなれた声がするな、と思つたら、パルスがいつの間にか復活していた。

ただ、顔には痣がある。

「む、生きていたのか」

「勝手に人を埋めるんじゃないよー！」

「あら、元気じゃない、パルス」

再びパルスを威圧するフィオネ。即座に平伏するパルス。

一体彼らは何が目的なのか。こつも同じようなことを繰り返されると、何か裏があるのではないかと勘繰りたくなる。

横目でそれをみたバツジオは、わざとらしく咳をする。

「えー、こほん。それでは、レクリエーションを始めるとしましよ
うかな」

「何をやるんですか、先生ー？」

「ふム。そこらへんはそう、生徒の裁量に任せるといふやつですよ。
自主性の尊重。重要でありますよ」

もつたいぶつた言い方だが、要は考えていないのだろう。

それだけというとバツジオはあるうことが、右手をあげて一言、信じがたい事を言った。

「それじゃ、私は今日のところはここまで。いやあ、書類仕事って
キツくてね。あ、これから片づけてくるの」

わざとらしく肩を鳴らしながら、俺たちのクラス担任は教室を後にする。

隣で目を輝かせて、何ていい先生なんだろうね、と言ってくる由理を見ると、俺はこの先ここでの学校生活がどうなっていくのか、あまりにも見当がつかず、不安を覚えることになった。

第5話 結局彼はなんなのか（後書き）

実に久々の投稿とあいなりました。

かませってつらいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0633w/>

魔法の国の空の下で

2011年11月17日01時04分発行